

大福遺跡第 30 次発掘調査出土の筒状銅器記者発表資料

財団法人桜井市文化財協会

調査名 分譲宅地造成に伴う大福遺跡第 30 次発掘調査

調査地 奈良県桜井市大字大福地内

調査面積 約 390 m² (148 m²・122 m²・120 m²)

調査期間 平成 24 年 8 月 6 日～11 月 30 日

1. はじめに

大福遺跡の概要 大福遺跡は寺川南岸の桜井市西部に位置する奈良盆地東南部を代表する弥生時代の集落遺跡として知られている。昭和 48・49 年に実施された第 1 次調査を皮切りとして、これまでに 29 回にわたって調査が実施されている。これまでの調査成果としては、調査地の東約 400m に位置する大福小学校内で行われた第 3 次調査では、方形周溝墓の周溝底において埋納された状態の銅鐸が検出された。第 26 次調査では、銅鐸片や送風管などの铸造遺物が、大量の土器とともに土坑内から出土している。第 28 次調査では、弥生時代中期中葉と後期後葉の 2 時期の遺構が見つかっている。弥生時代中期中葉（紀元前 1 世紀中頃）の遺構は、可能性があるものを含めて 5 基以上の方形周溝墓を新たに確認している。

第 30 次調査の概要 調査は坪井・大福遺跡の東南部に位置し、第 1 次調査地の東側で行った。今回の調査では、奈良時代の井戸、藤原京北三条大路北側溝、同東五坊大路東西側溝、古墳時代前期前半（4 世紀前半）の方形周溝、弥生時代の坪井・大福集落を取り囲む環濠の一部を確認することができた。特に環濠の内外で遺構密度に差があり、この環濠の北西に居住域があったことが考えられ、これまでの調査成果と合わせて、大まかな集落域が判明したといえる。加えて、今回確認した環濠は出土遺物があまり多くなく、破片ばかりであることから多重環濠の外側に近いものの可能性が考えられる。

主な遺物には、斎串や横櫛などが奈良時代の井戸から出土したほか、環濠からは弥生時代中期の土器や石包丁が出土している。

2. 筒状銅器の概要

出土時の状況 2 トレンチにおいて、古墳時代前期前半の方形周溝が形成される層位を掘削中に出土した。出土地点周辺を精査したものの、この遺物を包含する溝・土坑などの遺構は確認できなかった。

法量・形状 長さ 9.1 cm、円筒の直径 2.2 cm を測る。器厚は計測箇所によってさまざまであるが最大厚は 4 mm である。重さは現状で 74g を測る。形状は筒状であり、閉塞はしていない。端部は一方は丸く終わり、他方は内側にわずかに折り曲げ、やや尖り気味に終わっている（以下、前者を上方、後者を下方と仮

